

## 日系ブラジル人の意識における世代間格差

依光 正哲

### はじめに

外国人労働者に関する「世代間利害調整」というテーマには、いくつかのアプローチが可能であるが、体系的なものを挙げるとつぎの2つのアプローチとなる。1つはマクロ的なアプローチであり、外国人労働者の第1世代を1つのグループと看做し、この第1世代グループが移住先の社会経済といかなる関係を取り結ぶかに注目する。即ち、短期的には、第1世代グループの移住先の社会での貢献と、その社会が第1世代を受け入れることにより負担する「社会的コスト」とのバランスが問題とされ、長期的には、この第1世代グループが老齢期を迎えた時に、その社会の「次世代」がどう支えるのか、という点が問題となる。端的には、外国人労働者の導入により、当面は労働力不足などの解消に役立ち、出生率の低下に歯止めがかかったとしても、その外国人労働者および家族員の定着のためのコストや外国人労働者の高齢化に伴う諸コストをどう分担するのか、という利害関係を調整する必要がある。

2つ目のアプローチはミクロ的な視点からのものであり、外国人労働者個人の世帯内部に焦点をあて、親の世代と第2世代の間での利害の相異や利害対立の実態を明らかにし、問題解決を探るアプローチである。どこの家庭にも人種を問わず世代間ギャップは見られるのであるが、外国人労働者家族に特徴的な現象は何であり、その問題にいかに対処するのか、を追求することになる。

外国人労働者の家族内部の世代間の利害問題を扱う場合には、さらにいくつかの方法に分かれる。1つは、特定の家族へのヒアリングやいわば内部観察に近い形でその家族に密着して状況を把握することである。ヒアリングレコードやルポルタージュはこの手法を採っている。2つ目の方法は、アンケート等によってデータを作成・収集し、大量観察に基づく分析を行う。この第1と第2の方法の中間に、第3の方法がある。外国人労働者個人やその家族員の支援・相談などを通じて彼・彼女らの状況をかなり正確に把握している一群の行政担当者・専門家・ボランティアの方々がおり、その日常的な取り組みの中での観察結果をインタビューやヒアリングによって明らかにする方法である。このアプローチをとったものが、既に発表した「外国人労働者の世代間利害に関する事例研究」(Discussion Paper No.39, 2001)である。

本稿は、ミクロ的なアプローチの3つの方法からすると、第1の方法と第3の方法との折衷的な性格を持った方法を採用している。我々は日系人に対する職業紹介を行っている機

関において相談窓口の担当者（以下では相談員と記す）から日系人家族の状況についてのレクチャーを受けた。同時に、この相談員が日系2世でもあることから、彼女自身の体験に基づいて、日系2世の意識と行動についても語ってもらった。本稿は以上のような枠組みで得られた情報を主要な材料として再構成したものである。（文中に相談員の意見として記した内容は、筆者の責任においてまとめたものであり、相談員には本稿の記述を点検した上で記述内容に同意するか否かの確認を求めなかった。）

## 第1節 日本に初めて入国した時の感覚

日系人に対する職業紹介や職業相談が日系人雇用サービスセンター<sup>1</sup> や公共職業安定所において行われている。我々が話を伺った相談員は、相談窓口において日系人の職業相談業務に従事してこられたが、同時にご自身が日系2世でもあり、日系人としての感覚も兼ね備えておられる。そこで、相談員には最初に日本に来られた時の感想からお話いただくこととした。

相談員は約30年前に結婚を契機としてブラジルから日本にこられた。一般には、2世は自分が魅力を感じるその国の文化にのめり込んで行く傾向があるが、親の方は母国とのつながりを重視し、子どもが母国の文化と離れることを阻止しようとする。そこに、どうしても親の思いと子どもの態度に落差が生まれ、親子の間で大変な確執となる。そういう一般的な傾向が見られるものの、第2次世界大戦と日本の敗戦を迎えて、ブラジルに渡った日本人の意識が変化し、日系人はブラジルに根付くことを志向するようになった。そのような変化を背景に、それ以後、日系人の二世のブラジル化が急速に進むことになる、と相談員は指摘する。<sup>2</sup>

もう既に30年ぐらい前のことになるが、この相談員は結婚を契機に、家庭の事情で日本に来ることになった。ブラジルでは経験したことの無い寒い12月の日本の空港に降り立った。降り立った瞬間から彼女には何か変な違和感があった。親が「日本という国はいい国だよ。あれがきれいだ。これがきれいだ。あれがおいしい。あれがいい」と言っていたので、彼女もそういう感覚になるであろうと自分で想像していた。しかし、その種の感情

---

<sup>1</sup> 日系人雇用サービスセンターは、南米からの日系人の就労経路の適正化および職業紹介を目的に、東京（平成3年）と名古屋（平成5年）に開設され、求人・求職相談、職業紹介、労働・職業生活相談などを行なっている。詳しくは、（財）産業雇用安定センター・日系人雇用サービスセンターが発行している『日系人を雇用するためのポイント』（平成13年）というパンフレットを参照のこと。

<sup>2</sup> ここではブラジルにおける日系人社会の基本的性格に関する言及がなされ、しかも戦前と戦後との比較がなされている。詳しくは前山隆『移民の日本回帰運動』NHKブックス、昭和57年、30 - 49頁参照。この相談員は、自分の兄弟と比較すると、上の兄や姉は日本的なものを持っていたが、自分は日系人社会のブラジル化が始まった時に成長していったので、日本文化の継承よりもブラジル化の比重が高い、と自己分析している。

は湧かず、感動もしない。富士山はきれいだと思ったけれども、別にそれが彼女の心の中に懐かしさと呼び起こすわけではない。何かすっきりしないものを感じていた。「なぜだろう、なぜだろう」と自問した結果、日本は彼女にとって異国だったということに気づいた。自分は親の文化を引きずってはいたけれども、私はやっぱり日本人ではないとその時に改めて気が付いた。そして、30年近くも日本で生活していながら、いまだに自分は日本人ではない、という思いを引きずっている、とのことである。

このような体験から現在の日系人の状況を類推すると、日系人の親が「本国へ帰ろう」と子どもを連れて帰った場合、多感な思春期を日本で過ごした子供たち、日本で育った世代は、母国に帰っても「異国」に來た感覚を持つことになる可能性が高い、ということになる。地球的規模での人の動きが活発になる「ボーダーレス社会」では、日系ブラジル人だけではなくて、日本で働いている外国人、あるいは他国に働きに行った人々の中に、同じような問題が発生していると考えられる。

## 第2節 ブラジルの人と社会

### 2-1 日系人の日本への流入

今日本には約25万人のブラジル人が流入しているが、大多数のブラジル国籍の人たちは単純労働者として働いている。

表1 南米国籍外国人登録状況(2000年12月末日現在)

	ブラジル	ペルー	アルゼンチン	パラグアイ	ボリビア	合計
1991	119,333	26,281	3,366	1,052	1,766	151,798
1992	147,803	31,051	3,289	1,174	2,387	185,704
1993	154,650	33,169	2,934	1,080	2,932	194,765
1994	159,619	35,382	2,796	1,129	2,917	201,843
1995	176,440	36,269	2,910	1,176	2,765	219,560
1996	201,795	37,099	3,079	1,301	2,913	246,187
1997	233,254	40,394	3,300	1,466	3,337	281,751
1998	222,217	41,317	2,962	1,441	3,461	271,398
1999	224,299	42,773	2,924	1,464	3,578	275,038
2000	254,394	46,171	3,072	1,678	3,915	309,230

(出典：法務省入国管理局登録課 都道府県別・国籍別外国人登録人員)

外国人労働者の導入が最初に問題となった時期に、専門家は「外国人労働者を入れることは決して好ましくない」<sup>3</sup>と主張していたが、相談員は「なぜ好ましくないのだろう」

<sup>3</sup> 例えば、高梨昌「正念場を迎えた外国人労働者問題」『国際人流』No.10、1988年、参照

と不思議に思っていた。日系人の在留許可が緩和された1990年ごろの話であり<sup>4</sup>、その後日系人が多数流入するようになった。そして、日系2・3世の流入が緩和されてからほぼ10年が経過した。現時点では、外国人労働者問題のひずみが次の世代、即ち日系人の2・3世を中心に出てきていると感じるようになったという。なぜそのようなひずみが発生することになったのかという問題について、相談員の見解はこれまでに指摘されてきたことと若干異なっており、注目に値する。

## 2 - 2 奴隷制の負の遺産

最初に指摘されたことは、ブラジルという国が16世紀から20世紀初頭に至るまで、奴隷制度をとっていたことである。ラテンアメリカ諸国は、「人種・民族の多様性と社会的対照性によって特徴づけられている」<sup>5</sup> といわれている。人種・民族の多様性は、ヨーロッパ人が「新大陸」を発見したときには、ラテンアメリカには「先住民」による社会発展の異なる多様な社会が既に存在し、ヨーロッパ人による新大陸の征服と植民が先住民の社会と文化に大きな変化をもたらし、多様性を生むことになったと指摘されている。

「一部を除き先住民の奴隷化に失敗したヨーロッパ植民者は、奴隷をアフリカから輸入した。・・・ラテンアメリカで黒人奴隷が集中した地域は、ブラジルとカリブ海地域であった。・・・先住民のモンゴロイド、植民者のヨーロッパ人、奴隷のアフリカ黒人、これら3人種が、今日のラテンアメリカの基本的な人種の要素」<sup>6</sup> となっている。そして、植民地時代の初めより人種間の混交が行なわれ、混血が今日のラテンアメリカ住民の特徴となっているのである。

ブラジルにおいては、1888年に奴隷制が廃止されるが、少数の大農園主に土地と富と権力が集中し、大多数の農民は貧困と飢えに苦しみ、政治システムから排除され、富裕なエリートと貧農とが文化的にも経済的にも分断されて来た。「奴隷制度が消滅して100年以上を経た今日でも、かつて皮膚の色のために被った社会的差別の影響から依然として完全に解放されず、有色人口の社会上昇のチャンスが制限されている。」<sup>7</sup>

ブラジル社会の歴史を通じて多くの人々が「搾取され続け」、この「搾取」の構造とその遺産に注目することによって、日本における外国人労働者問題の解明への重要なヒントが与えられる、と相談員は指摘する。この点については後に再度触れることとする。

## 2 - 3 ブラジル人の気質

---

<sup>4</sup> 1990年の出入国管理法の改正により、日系2・3世の在留資格取得の条件が緩和された。

<sup>5</sup> 中川文雄・三田千代子編『ラテンアメリカ 人と社会』、新評論、1995年、14頁。

<sup>6</sup> 同上、17-18頁。

<sup>7</sup> 同上、26-27頁。

ところが、ラテン民族はとても面白い民族だ、と相談員は言う。ラテン民族の心の中を深く探っていくと、彼らには憎しみ・悲しみ・諦めなどいろいろなものが錯綜していることが分かる。しかし、それらを何かうまく浄化していくというのか、そういうものに固執しても社会は何も良くなると達観している。日本人のように社会に対して何かを期待する、ということがない。それでも、表面的には明るさを保っており、大した民族だ、という見方である。ブラジルは国としてはガタガタでありながら、それでもブラジル人は日本人よりもはるかに明るく振舞っている。

そこで、ブラジル人の気質をもう少し踏み込んで観察することとする。以下では一般の研究論文とは異なり、相談員の語り言葉を極力再現して、そのニュアンスを伝えることに努める。このような手法を採用した理由は、筆者の観点から問題の所在を明確にするためであり、問題点を深める作業は今後の課題として残されている。

## (1) 社会の階層構造

### 社会的格差

ブラジルでは貧富の差、教育レベルの差があまりにも大きいため、社会意識というかモラルの差がはなはだ激しいのです。例えばここに物を置いておいたら、あっという間になくなってしまうような社会を底辺に、上層には、あんなにすごい人になれないというくらい、礼儀の点でも、エチケットの点でも、人に対する点でも、知識の点でも、すごいものを持っている人がいるのです。そういった意味で、社会階層間の格差が激しいところがあります。

そして、金持ちは優れた人間という意識も根深いのです。「偉いから、賢いから、あんたはお金をもうけられたのだらう。私はお金をもうけられずに苦労している」と考える傾向があります。どんなことをしてでもいいから、とにかく金持ちになったら「この人は偉い人」と思う傾向があるから、社会的にあまり好ましくないことをしてお金をもうけた人でも、社会が受け入れてしまう傾向があるのです。だから、日本円で言うと100億円ぐらいの税金をちょろまかして少し外国へ逃げている、ほとぼりが冷めた頃に帰ってきたら、みんなが受け入れるのです。

そういう感覚は日本人には分からないかもしれないけれども、あの国の不思議さであり、私たち日系人にもちょっと分からない点でもあるのです。

### 何もしないのがステータス

ブラジルでは、額に汗して働くのではなく、何も仕事をしなくてもいい生活が出来る、というのが社会的に高いステータスだと思われる。ブラジルの大農場主のような富豪の人たちに見られる考え方なのです。奥様は何もしないのです。奴隷制度の名残で安い賃金で家政婦などが雇えますから、家に4～5人の家政婦さんがいて、自分は何もしないで

いることがステータスということになる。そのような考え方がいまだに生きています。地方都市などではまだまだ根深く残っています。この考え方には日系2世はあまり馴染みがないのですけれども、3世には多少あるかもしれません。逆に、中産階級や学歴の高い女性にはそういう傾向は少なくなっております。

## (2) 人と人とのつながり

### 言葉によるコミュニケーション

ブラジルでは世代間のギャップが比較的少ない。家族の間での会話が極めて多いということから来ているのでしょう。ブラジルという国は文字文化ではなくて口頭文化<sup>8</sup> ですから、非常に会話が深い。コミュニケーションには長けているけれども、お互いに伝え合うインフォメーションがあまり的確ではありません。口から伝わることはあまり確実ではないのです。書いたものをきちんと渡さない限り、正確なインフォメーションは伝わらず、間違ったことが伝達されるというところがあります。

日本は文字文化の国ですから、物事を非常に的確に文章にして渡します。渡された私にしてみれば、「どうして言葉で言わないのだろう」と思うのです。文字で読むと私の頭の中には入りにくいというところがあります。私は27歳までブラジルにいたものですからやはりブラジルの的です。

### 対人エチケット

ブラジルの人々の行動を理解する上での1つのポイントは対人エチケットです。ブラジル人というのは人を不愉快にしないテクニックにとっても長けているのです。ポーカフェイスもうまいのです。不愉快な顔をして人を嫌な気分させるということがあまりないのです。だから、「うん、大丈夫よ。私に任せてください、私はあなたのためにこうしてあげる」という言葉をその通りに信じるといことはとても危ないのです。けれども、それを言わざるを得ない社会のエチケットがその中にあるのです。その言葉が本音なのか嘘なのかという判断は向こうの人には出来るのですけれども、日本人がそれを判断できないと、騙されることになるわけです。

でも、本当は親切とか思いやりがあり、人を孤独にさせないということにすごく気を配っているのです。例えばこんな経験をした日本人がいます。自分がブラジルでホームレスになって、ある時どこへも行くことができなくて、ある家に行って「庭の片隅にでも寝かせてくれないか」と言ったら、「どうぞ家に入ってきて寝て」と言って、御飯を食べさせてくれて、寝かせてくれて、お土産まで持たせてくれた。あの時のあの優しさは忘れられない。そういった温かいものをブラジル人は持っております。

---

<sup>8</sup> 音声による意思の伝達を指している。

排他的なところがないのです。日本人は遠慮とかいろいろなもので、相手に「あなた困っている？では、こうしてあげようか」というようなことをあまりしません。日本人は他人からあまり深く入られては困るので、自分の周囲をガードしているところがあるのです。あちらの人はそれがあまりなく、人に対して「この不愉快なやつ」と思ってもあまり顔には出さない。だけど日本人は露骨にそれを出すところがあって、日系人の中にはそのことを嘆いている人もおります。

ところが、排他的なところがなく、嫌悪感も表に出さないだけに、うそや泥棒行為も許してしまうのです。物事には裏と表が必ずあって、いいところばかりではないのです。

### **寛容さ**

ブラジル人が誇ってもいいことだと思うものに「寛容さ」というものがあります。例えば外国の人がブラジルに行った場合に非常に心地よく感じるのは、だれも、どんな人間でもその人をそのまま受け入れるという土壌が向こうにはあるのです。日本に来ると私は、相手が違和感や嫌悪感を抱いているということを敏感に察知することがよくあるのです。それに比べるとあちらはとてもおおらかに他人を受け入れてしまうのです。

私は子供を生む時に思ったことがありました。もし私の子供が身体障害者で生まれた場合、多分日本で育てる勇気はないだろう。そのときはブラジルに帰ろうと思っていたくらいでした。向こうでも、身体障害者をからかったり、差別したりするけれども、日本のように冷たくはないと思うのです。

ブラジルという国は、差別といつも向かい合って生活している社会です。黒人もいるし、いろいろな国の民族もいるし、大体自分たちが移民としてやってきた歴史があるわけです。だから、差別感とかそういったものと絶えず向き合っており、訓練されているということがあるのかもしれない。

日本はずっとそういったものを意識せずにきた国ですから、ボーダーレス社会になった時に日本人が抱いている違和感とか嫌悪感を意識し、それを克服する訓練をしていかなければいけないのかもしれない。

仲間はずれや人から無視されることがどんなに寂しいかを向こうの人は知っているのです。自分がそういう目にあった経験がある民族だからそうなのかもしれません。ブラジルの子供たちが日本の学校に入って「いじめ」にあった場合、「いじめ」そのものよりも、だれも自分を助けてくれないことが一番悲しい、と言います。そんな時が一番孤独感を感じる時だそうです。

### **(3) 個々人の行動様式**

#### **権利ばかり主張する**

ブラジル人は自分の義務よりも権利を強く主張する。私の義務というと、何しろ奴隷制

度があった国ですからどこまでも搾取され続けるのです。だから権利を主張しないと駄目な国なのです。ポルトガルはそうでもないのですけれども、隣のスペインという国はその昔中東の占領下にあった国ですから、中東の人たちの考え方がけっこうあるのです。あの人は絶対に謝らない。ブラジル人もその点では同じものを持っています。

「縁の下の力持ち」を嫌います。奴隷はいつも「縁の下の力持ち」であったが、「自分たちはもう奴隷ではなく、縁の下の力持ちの仕事はしたくない」という意識があります。「縁の下の力持ち」のようなことは嫌だ、というのです。

このことが、日本に出稼ぎに来ているブラジル人の意識・行動と関係します。同時に、日本人からは嫌われる要素の一つになっているのです。彼等は権利を主張します。また、搾取にはとても敏感です。相談窓口で「私は奴隷ではない」という不満をブラジル人からよく聞かれます。私は「お金をもらっているでしょう。だからあんたは奴隷と同じようなものだ。」と冗談半分でいつも言うのです。

### **金銭感覚**

金にはものすごくうるさい。家長が財産のひもを握っているので、どうしても男がお金のことうるさくなっていくのです。家長がお金を握っているので、主婦はお金の管理能力があまりない場合が多い。このことが原因で、出稼ぎの人であまりお金を残せないケースが結構見られます。例えば、ご主人が日本で一生懸命働いてブラジルにお金を送っていても、帰国してみると全く貯金がなかった、というケースがよくあります。家を買うためのお金を送ったにも拘わらず、帰国してみたら何も残っていなかった。そこで離婚騒ぎになった、とかということもたまに聞きます。

家長がお金を握ってお金にうるさい場合、日本人のようにお金に淡泊ではありません。とにかく、この仕事をしたら私はこれだけのお金をもらえる、という気持ちが常に支配しており、お金に換算できないようなところでは自分が能力を発揮しなくなってしまう傾向が見られる。他方、日本人の家庭では、主婦が財布のひもを握っているということは、ある意味で男性の行動を大変自由にして、自分の仕事に打ち込めるといことになるのではないかと思います。

### **棚ぼた式の利益は大歓迎**

ブラジル人は棚ぼたが大好きなのです。もちろん日本人だって棚ぼたは大好き。これを嫌いな人はいません。そうでなかったらだれも宝くじを買わないでしょう。ただし、ブラジル人はそれを恥ずかしいと思わないのです。日本人は少し恥ずかしく感じるでしょう。だから限度を知っています。しかし、あちらの人はくれるものは何でも拒まず、すべてもらう。だから、税金をちょろまかして「じゃあ、あんたにちょっとあげる」といったら「ありがとう。あなたは私のアミーゴ。友達」といった調子で、その悪い仲間に入ってし

まうのです。

### 楽天的思考

ブラジルでは人々の焦燥感とか不安感とかが日本人よりずっと少ない、というのは不思議です。ブラジルという国はあれほど荒れ果てていて、あれほど大変なのに。例えばブラジルでしばらく生活し、日本に帰ってきますと、何で日本人とはこんなに慌てふためき、いらいらして、何かに縛られているような感じで生きているのだろうか、と思うことがあります。忙しさの違いなのかとも思います。日本人は正義感、義務感とかにいつも縛られているようで、絶えず焦っており、ほかのことが目に入らず、自分のことだけを見ているというところがあるのかもしれませんが。ただし、日本で働いているブラジル人は「楽天的に」行動してはいません。ブラジル人としては例外であり、非常に疲れて暮らしています。ブラジルに行くと、特にそのことを感じます。

### 第3節 日系ブラジル人の世代間の差異

以上のように語り言葉を再現することによって、ブラジル社会の気質を感覚的に把握することができた。このブラジル社会に日本人が移民として渡っていったのである。そこで、次に日系人移民の家族関係の変遷を見てみることにする。

#### 3 - 1 海外への移民と日本人としての誇り

日本からブラジルへの移民は、1908年（明治41年）の笠戸丸の就航によって開始されるが、この移民は、「黒人奴隷に代わる労働力の補給として受け入れられたヨーロッパ移民、特にイタリア移民の停止に代わって実現をみたものであった。」<sup>9</sup> 日本人移民はコーヒー農業のコロノ労働力を補充する役割を果たしたのである。その後、コロノ移民と平行して「自営開拓移民」が送り込まれた。日本人移民は、「出稼ぎ・金もうけ・帰国」という目的を達成するために、第1に家族の全労働力を投入し、第2に血縁者・同郷者による地域社会を形成し、第3に故国とのつながりを維持しながら、熱心に子女の教育を行った。こうして、「賃金労働者に留まるのではなく、商品作物生産者になる道に努力を傾け」<sup>10</sup>、自作農になり、自作農は経営の拡大を図り、社会的階層の上昇を目指したのである。分かりやすい表現を使うならば、「十何年たったら日本へ帰りたい。トランクいっぱいにお金をつめて帰りたい。できれば子供は日本の学校へ入れたいが、それがかなわなければ、日本語と日本文化だけは現地できちんと教育しておこう」と親たちは考えたのである。そして、親たちは過酷な状況の下でとにかくよく働いたのである。

---

<sup>9</sup> 石川友紀『日本移民の地理学研究』、榕樹書林、1997年、528-529頁。

<sup>10</sup> 同上、531頁。

日本人移民を駆り立てていたものは何かという点について、相談員は次のように述べている。

「あの山の向こうに何かいいことがあるのではないだろうかという思いで、近くではなくていつも遠くに何かいいことがあるという夢を追い求めて行ったと思うのです。日本人移民はまじめで日本人としての誇りを持っていました。誇りは時によると他民族に対する差別にもつながります。私はそれが本当に醜いと思ったことがあるのです。そういった点があることはあったのですけれども、とにかく自分たちは世界に誇れる民族だという意識があったのです。」

現にブラジルでは、鼻の低い東洋人、顔の平べったい東洋人とばかにされ続けているにもかかわらず、自分たちが優れていると思っていたのです。基本的に日本の国を愛し、日本に帰ろうと思っており、自分は日本人であるという誇りを持ち、差別にめげずによく頑張ったのです。」

しかし、第2次世界大戦での敗戦により、出稼ぎ移民の性格が大きく変化し、現地への「同化」をたどることになる。日系人の2世は自然に同化の方向をたどり、戦後の日本の荒廃に関する情報を契機として日本への帰国を断念し、ブラジル社会への定着を志向する傾向が出現したのである。かくして、農業部門に集中していた日本人移民が都市的産業に進出するようになる。<sup>11</sup>

### 3 - 2 日系2世

ところが、今度は2世・3世が日系人として日本でデカセギ労働に従事することになる。日系2世・3世の状況について、相談員は次のように分析している。

#### (1) 誠実で努力家、働き者

日系2世の特徴点として以下のような点が指摘された。まず第1は、日系2世とブラジル人との対比である。

「日系2世はブラジル人と違って非常におとなしくて、ブラジル人と比べると自分のことをあまり主張しない。逆に遠慮し過ぎる人もおります。責任感も強いし、ブラジル人的な人の良さ、明るさ、簡素さを持ち合わせていて、とってもいい人がいる世代だ。」

「彼・彼女たちは、勤勉でよく働くが、世渡りが上手ではない。日本人はブラジルでは決して世渡りが上手だったとは言えないのです。コツコツと、とにかくよく働いたけれども金持ちになった人は少ないところを見ても、決して世渡りが上手とは言えない。どちらかということ日系二世のほうがブラジル人よりも無口です。コミュニケーションも下手だと思う」と指摘する。

日系2世の日本でデカセギ労働に関しては次のように指摘する。「日系人2世の良さは

---

<sup>11</sup> 同上、531 532 頁、参照。

誠実で努力家、働き者であり、社会の規則を大切にすることです。彼らは日本の国に畏敬の念と誇りを持っています。親を見ながら育ったため、日本の国に最高に畏敬の念を持ち、自分の親が生まれた国を自分たちでけがしてはいけないと思い、とても大切にしております。だからこそ、日本人の労働者が集まらず、1カ月ももたないような職場で日系人が10年も働き続けているケースが見られるのです。」

さらに、日系2世は、「人生の目標や目的意識を持ち、それらに向かってひたすら努力するところなど日本的です。私たちが調査しても分かりましたけれども、日系2世は日本で2年、3年働いて自分は家を持つと計画し、ほとんどの人が計画通り家を買ったりしているのです。それなりのお金を貯めて帰るところまでは実現させるのです。」

ところが何か世渡りが下手ですから、日本で必死に努力して200万、300万というお金を持って帰ったけれども、向こうの国に行って、自分は事業を始めたときに、ほとんどの人が失敗して、1年から2年以内にそのお金を使い尽くしてしまうのです。それはとても残念だし、今ブラジルの政治、社会がなかなか簡単に成功できるような社会ではありませんので仕方がないことかもしれません。どちらかという、うまく生きるということにおいては韓国の方のほうがうまいかもしれません。」

## (2) ブラジルでの社会階層が日本で逆転

日系1世の人たちは、子どもに農業を継がせた人もいるが、自分たちの苦勞を子どもにかけさせないように、子どもへの教育を熱心に行い、高等教育を受けさせ。しかし、高等教育を受けた2世は世渡りが下手で、リーダー的存在よりもどちらかという公務員や会社員として働く者が多い。自分で事業を興してどんどん成功していくというケースはあまり見られない、と指摘する。

ところが、日系2世が日本でデカセギ労働に従事することになると、日系人の間でのブラジルでの教育レベルの差が反映されず、むしろ逆転した扱われ方となる。教育を受けて中産階級の階層へと上昇した者と農村で農業関係の仕事をしている者とはブラジル社会では階層の差がある。日本に来ると評価の対象は学歴や社会的地位ではなく、「日本語能力」である。農業・農村の生活が長かった人や高等教育を受けられなかった2世は日本語を話す能力が高い。親とのコミュニケーションや親と一緒に働いていた関係で日本語の会話ができる。逆に、都会生活者や高等教育を受けた人は日本語が話せない。即ち、階層の面でも文化の面でも、日系人2世は分化しはじめている。

このような階層や文化の異なる日系2世が日本に来てデカセギをはじめると、「教育レベルに関係なく、とにかく単純労働者として一生懸命働くこと」が重要となる。そして、ブラジルでの階層が日本の職場では逆転することになる。ブラジルでのステータスが高い者は「日本でも上位の者として扱われる」と思っていたとしても、日本に来ると、逆の立場になってしまう。日本の会社では、「あなたは日本語ができる。あなたの方が使いやすい

いから、あなたを優遇しよう」となり、日本語のできる人を雇用し、責任者に指名して便利に使うことになる。そうすると、これまで下位に見られ多少劣等感のあった日系人は、今までの鬱憤を晴らすかのように、ステータスの高い人たちを逆に差別したり、いじめたりする傾向が出てくる。この種の確執というのは、日系人をたくさん使っている会社の中では頻繁に起こる現象であり、相談窓口はこの類の日系人同士のけんかやいがみ合いがけっこう持ち込まれている。

### (3) 日系人のブラジル化

日系人の2世が既に階層分化していることは触れた。日系2世も自分たちの親と同じように、子供に何とか教育を受けさせよう、子供に自分よりもっといい生活をさせようと努力してきた。ところが、その大事に育てられた子供はどうなるかということ、もちろん例外も見られるが、ブラジル化が急速に浸透してきている。日系3世には日本文化の継承があまり見いだせない。どんどん日系人以外の人と結婚し、身のこなし、価値観などブラジルのようになっていく。しかもそのブラジル化という現象が、ブラジル社会の階層の観点からすると、中から下のレベルを継承している、と相談員は嘆いている。

日系人が向こうで社会に溶け込もうとしたときに、白人社会での差別に直面する。ブラジル社会の中流階層やその上の層の人たちは日系人などあまり相手にしない。従って、日系人たちが自分たちの結婚相手とか付き合いの相手には、それ以下の層ということになる。

このような傾向に拍車をかけていることは、日系人の男性が「お坊ちゃん、のほほんとしており、お金も全部奥さんに渡す」人たちですから、人を見る目があまり厳しくない。だから、「あなた大好き」と言ってきた人とあまり見極めないで結婚してしまう。こうしてどんどんブラジル化が進むことになる。日本的な基準からすると、「何でこの人はこんな程度の悪い奥さんと結婚したのか」ということになる。

## 3 - 3 日系3世

### (1) 日系人の中でのブラジルの階層格差拡大

ブラジル人と日本人の結婚に関しては次の点が指摘された。即ち、女性が日本人の場合とブラジル人の場合では、子供の育てられ方が異なり、子どもの社会階層が違ってしまふ。ブラジル人を母親とした日系3世は、貯蓄などの明日の生活を全く考えない人が多くなっているというのである。

3世全体に当てはまることであるが、物質的な誘惑に弱く貯蓄ができない。また、2世ほど子供の教育に熱心ではない。悪い意味でブラジルのようになってしまった3世が見受けられる。全員がそうだというわけではないが、「うそは言い、窃盗は平気、社会秩序を乱すのは平気、薬物を使用するなど快楽嗜好が強い層が増加し、目的意識を持って継続した努力が苦手」という3世が多くなっている。

ある県では、警察のお世話になるブラジル人が多く、「道路交通法を守らない。要するに免許を持たずに運転するとか、スピードオーバーが大好きだとか、事故を起こして逃げるとか、様々なことがあるのです。」それらを含めて日系人の行状がすごく悪くなっている。良いことは継承されず、悪いことばかりが継承されていくような気がする、と相談員の嘆きは続く。

そして、3世の中で社会レベルや意識の差が顕著になってきている。一方に上層の3世がいるが、他方には、どうしようもない層が多数を占め、ブラジル社会とほぼ同様の階層差が発生している。このことは日系人社会にとっては大問題となる。

## (2) 出稼ぎのひずみ

日本にデカセギに来ている若い3世たち、30歳ぐらいまでの3世たちは、デカセギ生活をしていた親の家庭で育った子供たちである。約10年間の海外デカセギ生活を一家の家長がしていた場合には、離れて暮らしていたその家族がどう変化するのかということを経験した3世は映し出している。

一家の主のデカセギ生活で、母国に残された者は物質的に豊かな生活を送ることが出来、そのことによって物質的豊かさのみを求めようになってしまう。地道に努力をすることを放棄してしまう。

日本にデカセギに来ていた親たちは一生懸命働いて、母国へ送金する。母国に残った片親ないしその祖父・祖母は、日本でのデカセギの苦勞の切実感がない。日本でどんなに苦勞して生活をしているのかが分からない。送ってきてもらったお金で暮らしていけるので、ついその家族はゆったりと暮らすことになる。母国に残された家族が一生懸命朝から晩まで働かなくてもよくなる。デカセギの送金で暮らせるとしたら、危ないブラジル国内で、リスクを負って仕事に行くよりも家の中で生活する方が安全であり、家の中にこもるようになる。家の中でこなす仕事は限られる。

何をするかというと、暇だからテレビを見て遊んで時間をすごすことになる。こうした環境で育った子供たちには、生活の切実感がない。できるだけ楽をして生活をしたいと考えるようになる。こうして、日系人社会には、これまでにない状況が蔓延することになる。

そのような人たちが日本にきてデカセギを開始する。その「どうしようもなさ」というのが、相談窓口にいると非常に目立つ。しかし、そのような姿は、実は親たちのデカセギ生活のひずみによって生み出されたものである、と相談員は指摘する。

## (3) 生活基盤をどこに置くのか

ところが、デカセギ生活に関しては、最初にポジティブな面が印象づけられる。即ち、「家を買った。これだけ貯金できた。」ということが目に付き、サクセスストーリーが人々をデカセギに駆り立てる。ところが、1つのサクセスストーリーにはそのあとの生活

をどうするのか、という問題が隠されている。生きていくためには生活費を稼ぐ必要がある。生活費を稼ぐために引き続きデカセギをすることになる。

そしてデカセギ生活に「慣れ」が出てくる。最初のころは、一生懸命貯金するだけの生活をしてきた者が、デカセギ生活が長期化すると、やはり日本人と同じような生活をしたくなる。もう少しいい家に住みたい、自分で借りた家に住みたい、車が欲しい、という欲求が出てくる。現に、日系人たちはかなりの比率で自動車を持つようになっている。

こうして、デカセギ者の生活ベースが母国ではなく、日本になってくる。もし日本に生活のベースを置くのであれば、日本での生活を維持するために最低限備えなければならないことがある。例えば、社会保険への加入であり、子供の教育などである。しかし、その類のことは母国にいずれ帰るからという考えで、大多数の日系人はキチンと対応してこなかった。そして、ずるずると日本で生活のベースが形成されるようになり、最低限のことすら確保していないことに気づくのである。それでも、母国に帰れば何とかなる、と相変わらず自分の義務的な部分を放棄して、日本での生活を楽しもうとしている。<sup>12</sup>

同じラテンの国から出稼ぎに来ているペルー人とブラジル人を比較してみると、日系ブラジル人の特色が鮮明となる。日本企業にとっては、ブラジル人のほうがよく働くので使いやすい、という状況がある。けれども、長い目で見た場合、ペルーの方が日本への適応では上を行っている。ペルー人は自分の国に見切りをつけて、日本に生活ベースを置いてしまっているのです。彼らのほうが自分で家を買いはじめているのです。どこかから金を借りて、本当に大丈夫かと思うのですけれども30年ぐらいのローンを組んで、自分で家を買っているペルー人が相当数いる。

ところがブラジル人は、いつまでたってもブラジルという国に未練があり、どうしてもあの国が懐かしいという思いがあり、ブラジルとの関係を切り離せない。従って、生活基盤を日本にしっかりと置くこともできない。それが今現在の日系ブラジル人である。

## 第4節 日系人の日本でのデカセギ労働

### 4 - 1 日系人の疲労感

#### (1) 日系人が接している日本人

デカセギの日系人たちは、10年も日本で働いていても、日本の普通の家庭に1回も足を踏み入れたことのない人が多い。それだけ日本人と日系人との間には生活上の距離がある。そして、デカセギの日系人が日常的に会っている日本人は、日系人の使用者であり、

---

<sup>12</sup> 「日本ではブラジルに思いを募らせ、ブラジルでは日本への思いを募らせる」という還流型移民について、「定住意識なき定着」「顔の見えない定着」「永住意思なき帰国」の3つの類型に整理がなされている。(森幸一「還流型移住としての《デカセギ》 ブラジルからの日系人デカセギ15年」法政大学比較経済研究所・森正廣編『国際労働力移動のグローバル化 外国人定住と政策的課題』法政大学出版、2000年、357-360頁。

同じ職場の従業員である。多くの場合、従業員と日系人とはお互いの家庭を訪問しあうことはない。日系人の使用者は、「いかに安く使うか、いかに搾取するか」ばかりを考えている人たちである。

正確な統計がないので確実なことは言えないが、日系人の約7割は派遣業者に雇用されていると推測される。派遣業者は企業と「請負契約」を結び、請負業務を行うために雇用している日系人を労働現場に「派遣」している。実際の労働現場では「間接雇用」の日系人と直接雇用の従業員が混在していることになる。<sup>13</sup>

## (2) 労働条件の整備

この間接雇用の形態で問題となることは、日系人の雇用主である派遣業者の経営実態や雇用管理実態がほとんど不明であり、良心的な経営者もいるが、極めて悪質な経営者が多く、しかもそのような経営者に雇用主責任を果たさせる規則が整備されていないことである。従って、例えば次のような雇用契約が実際にはなされることになる。「あなたにはビザがある。では1カ月後に給料払いましょう」「あなたはビザがない。だけど使ってあげよう。あなたの給料は3カ月後に払おう」という具合の契約である。

企業はこの「間接雇用」を便利に活用している。自己が雇用するのではなく、仕事の変動に合わせて、間接雇用の労働者の数を調整することができるからである。

このような事情は、10年前も今もほとんど変化がない。相談員は10年ほど前にこのような状況に対処する法的措置の不備を感じたが、やがて改善されるであろうと思っていた。しかし、現在でも状況は少しも変わっていない。その意味では、日本の変革のスピードは大変に遅い。

間接雇用はある意味で便利な仕組みであり、人手不足の時には、日系人にとっても短期的なメリットがあった。日系人の時間給は上昇し、日系人は10円でも高い仕事へと流れ去っていったのであるが、かれらの労働移動をささえたのが派遣業者であった。

しかし、間接雇用の労働者は無権利状態に放置されていることになる。このことは不況期に明白となる。不況下で雇用情勢が悪化し、賃金の切り下げ、労働条件の悪化などが発生するが、それらを救済する法的な保護が受けられない。

日系人が「不当な扱い」と感じることに對する法的な保護がない状態は、日系人の心の中に疲労感や虚無感、あるいは差別感を広げることになる。肉体的な疲労感も含めて精神的な疲労感と虚無感が日系人から伝わってくるようになる。

## 4 - 2 受入れ体制の問題点

---

<sup>13</sup> 労働省の「外国人雇用状況報告」によれば、平成13年6月現在の外国人雇用状況は、直接雇用の外国人9,956人、間接雇用91,367人となっており、間接雇用の比率が高い。

## (1) 受け入れる国としては何をなすべきか

受け入れ国として果たすべき問題は何か。この問題は簡単に答えの出る問題ではない。人によってそれぞれの考え方があり、その考え方の背後にある思想も異なっている。ここでは、日系人の職業相談を長年経験してきた相談員の考え方を整理してみる。

現実には、日系人が合法的に入国し、在留活動に制限が付されることなく、労働現場で就労している。この現状を相談員がどう見ているかという、「あなたを働かせてあげましょう。あなたの国よりも仕事はあるし、賃金も高いでしょう。ありがたく思って働きなさい。だけれども法的保護は何もありませんよ」という状態である。このようなことは昔の植民地の時代と同じやり方だと指摘する。

植民地の時代であれば、このような扱いは結構なことと思われたであろうが、現時点では問題となる。問題とされている点は、1人の人間を就労目的の観点からしか考えていないことである。つまり、人間は確かに労働するのであるが、もっと長い目でみると、その人間の生活や家族の問題、さらに政治の問題などを含めて考える必要がある。1人の人が入ってくると、その家族が入ってくる。子供が入ってくる。その人たちを受け入れていかななくてはならない。また、いろいろな問題が発生する。問題が発生すれば、それらをなんとか解決していかななくてはならない。現に外国人が日本で働いているのであるから、以上のことから逃げてはならない、と相談員は主張する。

そこで、日本はこれまでの政策を変える必要がある。そのためには、まず意識を変えることだと主張する。意識変革の内容は次のようになっている。

## (2) デカセギ者の社会階層の確認

国際労働移動の原点は、所得レベルの低い地域から高い地域への移動である。現在のデカセギもそのようなフレームの枠中での労働移動である。技術者等の移動を除外すれば、デカセギに来る人というのは、低いレベルから日本の高いレベルを目指してきた人たちである。社会階層の概念を国際的に拡大すれば、レベルの低い国、貧しい国の教育レベルの低い人が単純労働者としてデカセギに来るわけであるから、受け入れ国の一般的なレベルよりも高い人は来ないと考えねばならない。

そのような低い階層の人たちを受け入れる側の国としては、自分の国民と同等の教育を彼らに実施し、さらに自国民以上に指導する必要がある。その意味で、受け入れる国は、とんでもないものを引き受けたと思って引き受けなければいけない。

現実の日系人の受け入れはどうなっているのか。企業が外国人を受け入れている。外国人の賃金はほとんどが時給である。10年前は日系人の時給は1200円だった。今では1000円出せばいい方で、800円のところもあるのが実情である。

時間給であるから、とにかく1時間でも多く仕事をしたい、超過勤務をいくらでもしたい、ということになり、1日に14時間でも15時間でも働いている人が出てくる。こう

なると、仕事場と自分の家、あるいは会社の寮との間を往復するだけの人生となってしまう。このような状況で、外国人労働者を受け入れて仕事をしてもらった場合には、受け入れ国は確かにその人たちの労働によって富を得る。もちろん日系人労働者もお金を稼ぐことになるが、日本の企業は外国人労働者の労働に助けられる。

#### 4 - 3 デカセギの負の遺産

ところが、長期的にみると、ペイしていると単純に考えることはできない。相談員が指摘していることは、例えば奴隷を入れた国を見ると、奴隷を入れていた時代、奴隷を使用した人たちは裕福な楽な生活ができた。その時はそのように見えても、その後どうなったのか考えてみる必要がある、というのである。奴隷が解放されて100年が経過したブラジルでは、強盗や殺人の犯人はほとんどがかつての奴隷の子孫であると言われている。先祖が採用した制度の「負の部分」を現在の世代が背負うことになったのである。

この奴隷制の「負の遺産」と同じように、社会の底辺の層を大きくすると、日本はその負の遺産を将来背負うことになる。底辺部分を教育し、かれらを同等に扱わない限り、それだけ将来負わねばならない「負の遺産」が大きくなる、と警告を発している。言うまでもないことであるが、「日系人労働者」を含めた「外国人労働者」は「底辺部分」を構成している。

長い目で見れば、現在の世代がある意味で搾取したときには、それは負の遺産をためこんでいると思ってもいい現象だ、という相談員の指摘は外国人労働者問題を考える上での重要な視点である。

受け入れ側の負の遺産は上述の通りであるが、デカセギをする側にも「負の遺産」が蓄積されている。第1は、仮に目標金額を達成し、母国に不動産を確保したとしても、前述の通り、子どもの教育が疎かになることは「負の遺産」そのものである。特に3世には日本語も母国語もいずれも満足な状態ではなく、いずれの国にも受け入れ難い若者が出現していることは深刻である。第2に、デカセギによってなるべく多くのお金を稼ぐために、長時間の労働に従事して、社会保険などに加入せず、また地域社会との接触もない状態で暮らして来たことである。このことの「ツケ」が病気や怪我の際にのしかかることになり、また、日本に定着しようとしても地域社会から孤立して、正常な生活を送ることが困難となる。

#### 第5節 研究面での成果と今後の課題

我々はミクロの視点から家族の内部に注目して、日系人の意識と行動において世代間でのどのような相異があるのかを示してきた。その結果、マクロ的な世代間の利害対立の姿が浮かび上がってきた。即ち、外国人労働者問題として重要な点は、前の世代が外国人労働者を「酷使」し「搾取」すると、そのことが「負の遺産」として次世代に引き継がれる、

という構図である。

この問題は、1つの時代における社会構造が次の時代の社会構造を規定する、という図式に単純化されるであろう。ブラジルの歴史に即して言えば、過去の奴隷制がその後の貧富の格差を拡大させ、その結果、社会の治安の悪さとなって顕在化することになる。外国人労働者問題にこのフレームを適用すれば、次のようになる。

外国人労働者を低賃金で酷使し、労働市場が「二重構造」化されると、社会の底辺を構成する外国人労働者の世帯では、子どもの教育レベルが低く、社会道德の欠如した子どもが成人になり、いわゆる「健全な成長」が阻害されることになる。このような「ひずみ」が社会的な弊害となって、犯罪の多発・社会不安などの形で顕在化し、社会全体を悩ませることになる。つまり、先の世代が外国人労働者を「酷使」して「利益」を得たとしても、次の世代は、さまざまな形態の「不利益」を蒙ることになる。

かくして、我々の今後の研究課題は、外国人労働者の活用に関する実態を詳細に調査し、いかなる「ひずみ」が発生しているかを明らかにし、「ひずみ」の発生を阻止し得る方策を検討し、将来の世代に「不利益」を負わせないためには何をすべきなのかを考えることとなる。しかし、実際には、難しい問題が潜んでいる。1つだけ指摘しておきたい。

日本に流入してくる「単純労働」に従事する外国人労働者は、階層の面でレベルが低いのが故に「単純労働」に耐えられるのであるが、この階層を固定化することは将来の社会不安につながる。従って、この階層の者およびその子ども世代を「教育」することが求められるが、その「教育」には費用が伴い、その費用を誰が負担し、実際にどのような実施方法があるのか、効果的な方法は何か、となると皆目見当がつかない状態である。つまり、外国人労働者の「導入」と外国人労働者の「教育」とは二律背反の性格を有しているのである。さらに、次世代にとって「負の遺産」となる「負」の部分を縮小させることが可能か否かをも検討しなければならない。つまり、「単純労働」の需要そのものを縮小させることができるのか否か、という点の検討である。